

復興を支える人と地域の+α

5

くりかえす火山災害からの温泉街の復興

2000年 有珠山噴火



永井 信久 NAGAI Nobuhisa NPO法人 洞爺にぎわいネットワーク

洞爺湖温泉は30～50年の間隔で噴火する有珠山麓にあり、噴火の度に復興をくりかえす。噴火ごとに状況の違った復興過程を振り返り、観光関連事業者や住民が一丸となり多様な観光的魅力を創出してきた知恵と工夫を紹介する。

にぎわいのある町、洞爺湖

1910年の有珠山噴火後、洞爺湖畔に温泉が発見されました。1943～1945年の昭和火山形成などの噴火の後、高度成長期など日本経済の発展と共に北海道観光の中心的存在となり、急成長をしてきた洞爺湖温泉街。町には旅館やホテルそして数多くの飲食店、お土産屋さん、おひしめき、夜遅くまでカラコロンと下駄を鳴らす千鳥足の観光客が温泉街を盛り上げていました。昼夜問わず、何もしなくてもお客さんが来る時代。温泉街はそんな好景気に沢山の雇用を生み、大型ホテル建設など多額の設備投資がされてきたのです。

突然の大噴火

突然1977年に有珠山が噴火。前日から得体の知れない地震が発生、数日前から家々には、なぜか山ネズミが出没。昭和火山が誕生してから山が噴火するなどとは、誰一人として想定していない時代。「なぜこんな地震が起こるのか」とは考えず、噴火前日には昭和火山で「噴火再現花火大会」が開催され、1万人以上の人々を魅了していました。

その翌日、有珠山山頂から突然噴火し、前日の花火が現実になったのです。ところが、まだ行政機関も住民も噴火災害の危機管理など、とうてい予想も出来ず、町は営業を続けていました。噴煙が上がっても町には観光客が沢山いたのです。

そして数日たった夜、大噴火が起きたのです。雨交じりの軽石と火山灰が降る中、すぐ帰れると思って

ックに乗り、旧虻田町の本町側に避難する事になりました。町には数人の住民保安人が残り、安全宣言が出るまで大半の住民が体育館などに避難していました。そして約2カ月後に洞爺湖温泉再開を迎えることになりました。

大半の事業者は景気のいい時代で経済などに余力があったため、お客様を呼び込むために試行錯誤しながらいろいろな企画を立ち上げました。その中には「一泊二食サンキューセール」と称する3,900円企画もあり、歓迎ムードを盛り上げ、翌年には「ロングラン花火大会」などを開催しました。現在まで続くその花火大会は、4月後半から10月末まで湖水で打ち上げる花火で、民間の出資で開催する一大イベントになっていったのです。また復興資金を借りて再出発をした企業は、バブル景気に乗った時代でもあり、噴火した時の石が売れるなど順調に再建を果たして行きました。



写真1 洞爺湖温泉街全景

しかし山麓に降り注いだ噴火の火山灰の影響が、じわじわと押し寄せてきたのです。それは予想を超えた泥流の発生です。泥流の発生を受け、今後の安全対策のため、町の上流部に砂防ダム、そして町中を横切る3本の泥流水路を建設することになりました。その水路建設により、にぎわっていた繁華街が衰退し、その後の温泉街に影響を及ぼしていく事になろうとは誰も感じていなかったのです。そしてまた突然悲劇が起こったのです。



写真2 洞爺湖と中島



写真3 2000年の有珠山噴火

繰り返される大噴火

2000年の有珠山噴火。30～50年周期と言われてきましたが23年で再噴火。ところが今度の危機管理は、雲仙普賢岳の噴火もあり、予想もしない徹底されたものでした。山麓噴火と言うこともあって規模的には1977年よりは軽い噴火でしたが、なかなか終息宣言が出ず、再開させてもらえません。やきもきしている観光事業者の気持ちも行政には通じず、半年後ようやく再開に向かう事が出来ました。

しかし1977年の噴火と大幅に違ったのは、観光に対しての経済が年々打撃を受け、その規模が予想以上に大きかった事でした。それらは、①定住人口である住民の移転、②企業の保養施設の撤退、③修学旅行の進路変更、④町の1/3の範囲に砂防ダムが建設、などにあらわれました。町を取り巻くこのような環境が復興を妨げ、噴火対策として一部の国会議員から出る集団移転案など、さまざまな意見が出る中、洞爺湖温泉は今回も復興に向けて立ち上がったのです。

住民組織の設立

噴火後、復興計画を作りたいとの思いから、いろいろな住民組織が生まれました。その中の一つに「にぎわい空間創出計画推進委員会」という組織が設立され、自治会、観光協会、商工会の関係者が集まり、町ににぎわいを取り戻すために、いろいろな角度から検討したのです。住民を集めワークショップを数回開催して、お金をかけないで計画を遂行していく事に奮闘しました。それは、①空き店舗のシャッターに札幌の美術学校の協力を得て絵を描く、②空

き店舗を活用してチャレンジショップを試験的に営業、③商店街の真ん中に火山学者から写真の提供を受けミニ火山展示場を設置、④にぎわい作りの為の復興計画のまとめ、などを行いました。

NPO法人洞爺にぎわいネットワーク設立

その後このような事業をまとめて復興計画を実行するため、任意団体だった組織をNPO法人化しました。

町の新たな観光資源として噴火遺構を残し、次世代に伝えていくため洞爺湖周辺の市町が団結し、火口郡などに散策路を設け、世界ジオパークの認定を受けるなど、行政関係の復興のシナリオは年々整いつつありましたが、民間の事業者の金銭的な面のダメージは相当なものでした。

有珠山金毘羅火口、西山火口散策路

2000年の山麓噴火では数百の噴火口が作られ、国道230号が寸断されました。この場所を新たな観光の目玉として活用する事と、次世代に遺構を残し災害を伝える事を目的としたのが今回の復興の特徴です。

JR北海道から線路の枕木を譲り受け、隆起した噴火口周辺に1本1本敷きつめて散策路とし、一般に開放して観光客の早期回復を目指したのです。それが当りました。「生々しい、迫力が凄い」など、いたるところから歓声が聞こえ、それに伴い地元の方々による「ガイドの会」が設立され、数多くの修学旅行や個人、団体が立ち寄り一大スポットとなっていったのです。



写真4 西山火口散策路



写真5 アニメフェスタ



写真6 湖畔カフェ

火山市民ネットワーク設立

今までにない新たな取り組みも始まりました。火山災害を受けた他の地域の市民団体が連携していくことを目的に「火山市民ネットワーク」が設立されました。有珠山、雲仙普賢岳、三宅島の団体を中心に活動を始め、2011年は有珠山地域で、全国ジオパーク大会と同日で第10回の交流会を開催しました。

当初は『災害生活支援法』の改正を願って署名活動を行いました。有珠山、雲仙普賢岳、三宅島3団体に加え、東京大学教授や弁護士、社会安全研究所の協力も得られました。有珠山地域では北海道国際大学や洞爺湖町自治会の協力のもと、多数の署名をいただき国に陳情するなどの活動をしてきました。

毎年開催される交流会は3地域にとどまらず、災害が起きた地域でも被災住民との座談会を行いながら、今日までに新潟や新燃岳などの市民団体と交流してきました。日本国内では数多くの災害が発生していますが、連携や情報交換を重ねる事により、民間ができることを伝え合うことで、災害にあったときの減災につながる事を願っています。

世界ジオパーク認定と洞爺湖サミット

洞爺湖周辺には火山以外にも観光資源として、湖、アイヌ文化、縄文遺跡などが豊富で、これらを活用しようと伊達市、洞爺湖町、壮瞥町、豊浦町が連携し整備してきました。それが実を結び、日本で最初の世界ジオパークに認定されたのです。2011年から、官民上げての取り組みが本格始動しています。

ハードを作るのではなく、ありのままの姿を保存して、手を加えないままの地域の素晴らしさを活用していく。そのような新たな取り組みは、自然が豊富な洞

爺湖周辺の観光にも経済効果をもたらしていくと期待しています。そんな自然を愛する取り組みが、世界を舞台にする一大イベント「洞爺湖サミット」の開催にもつながったのです。

映画『しあわせのパン』

有珠山噴火がもたらす災害も負の遺産ばかりではありません、洞爺湖サミットでも認められた景観は、映画やテレビなどの舞台としても多く活用されてきました。

2011年洞爺湖を舞台に撮影を開始した映画『しあわせのパン』は、2012年1月全国公開されます。噴火災害10年以上たった今でも、数多くの皆様のおかげで、いろいろな取り組みを仕掛けていただいております。「まだまだ魅力ある地域なのだ」と痛感させられる思いです。

アニメフェスタ

今や世界を魅了する日本のアニメは、今後の世界を相手にする観光日本に、少なからず影響を及ぼしていくと考えています。そんなところに、人気アニメ『銀魂』の主人公が持つ木刀に「洞爺湖」と刻まれている事から、一躍ファンの間に洞爺湖の人氣が語られるようになりました。木刀は、修学旅行の生徒さんたちには隠れた人気アイテムとして根強く、昔から観光土産として売られていましたが、このような形で全国に発信される事になり、関係者一同びっくりしている次第です。しかしこれを縁にアニメ界とのパイプができ、洞爺湖町のオタク達はメラメラとアニメのように心に炎を燃やしたのです。

洞爺湖全体がコスプレ天国。アニメコスプレの方々によるパワーは凄く、洞爺湖を舞台にした「洞爺

湖アニメフェスタ」で、地域の方々のオタクイメージを一新させた事は間違いありません。新たな観光資源としてのアニメパワーは世界を舞台にする洞爺湖観光に、一筋の光を当てた事は間違いのない事実なのです。

ワンストップサポート事業

いろいろ話しましたが、共通するのは「この自然をありのままに活用して、お金をかけないで町づくりをしていく事」であり、自然の美しい洞爺湖観光の原点だと感じています。1977年の噴火後は、花火大会などにお金をかけて復興を成し遂げてきたのですが、今後は、今までのあり方を見直す時期にきたことは間違いありません。

NPO法人洞爺にぎわいネットワークは洞爺湖の広大な自然の敷地を舞台に、スポーツや文化の合宿誘致に力を注いでいます。今までは相談があっても、窓口がバラバラな行政機関への申し込みでは、お客様の手間が多く、大変わずらわしいものでした。それをNPOが無償でサポートするのが今回の試みです。行政の施設を利用して、地域観光の経済効果を上げるのが最大の目的で、今やサッカー、野球、空手、剣道など数多くの利用者が洞爺湖を舞台に活動しています。今後は、文化系のよさこいソーランやストリートミュージシャンなど数多くの利用者が洞爺湖を舞台に活躍されていく事が期待されています。

食材の豊富な洞爺湖

やはり観光の魅力アップには欠かせないのが食です。今やどのような小さな町や村でも観光地を目指し、そのアイテムとして魅力ある食の開発に力を注いできています。ところが、洞爺湖温泉は素晴らしい景色にあぐらをかいて、中々食の魅力作りに挑んでこなかった事で、ここに来て、洞爺湖の食のイメージ低

下を招いた事は間違いのないのです。

噴火がもたらす火山灰が畑に降り積もる事により土壌が良くなり、洞爺湖周辺には数多くの野菜が栽培されています。波が穏やかな噴火湾にはホタテ、カレイ、ソイ、ボタンエビ、ウニなど豊富な魚貝類、湖には淡水魚のヒメマス、山には山菜やキノコなど、他の地域と明確に差別化ができるアイテムが豊富にあります。

しかし逆に何でもある事が、観光に活かしきれていないという明確な問題として、ここ数年話し合われてきています。その中で洞爺湖畔に官民協同で湖の見える「湖畔カフェ」を設置しました。お客様に地元食材を使ったハンバーガーや野菜を使ったケーキなど多くの魅力あるメニューを開発して、2010年と2011年に洞爺湖温泉誕生100年を記念して開店したのです。洞爺湖を見ながらのカフェは、数多くのお客様の心をつかみ好評価をいただきました。

今後の食の発展に期待を寄せているのが、洞爺湖で飼育されている赤毛と黒毛の2種類の和牛です。肉質が違うこの牛肉は、洞爺湖の新たな魅力アップに、必ず力を貸してくれるに違いありません。

未来ににぎわいを

噴火を繰り返す有珠山は、また近い将来噴火する事は間違いありません。そんな山の麓に位置する洞爺湖温泉は、噴火するたびに泉質のいい恵みの温泉をいただいておりますが、噴火するたびに温泉街が縮小していく事も避けられない問題の一つです。

しかし明確な戦略が見出せない今は、手探りで答えを見つけるまで、数多くの戦いに挑まなければなりません。近い将来、にぎわいがある温泉街に戻る事を期待して、今後もNPO法人の活躍を続けていきたいと感じています。



写真7 開発メニューの試食会(ごはんのお友)